戦時下のねぶたと父〈上〉

宇都宮　弘之

官選知事で青森へ赴任

今年も「ねぶた」の季節が近づいてきました。今年は青函トンネルの開通や青函博の開催もあって、祭りの灯はいっそう華やかに夏の夜を彩ることでしょう。この機会に私事にわたって恐縮ですが、戦時下のねぶたの思い出と父のことなどについてすこし触れさせていただきたい。

私の父、宇都宮孝平は今年の五月、青森からは遠い四国路の松山で九十二歳の生涯を終えました。愛媛に生まれた父は関東大震災のあった大正十二年、自治省の前身ともいうべき内務省に入省、東京府、本省、兵庫県などを経て昭和九年の夏、青森県書記官・学務部長として赴任しております。その後、ふたたび第二次大戦下、戦況が日増しに不利になり〝北の守り〟が容易ならざる事態になりはじめた」（父の自伝）昭和十八年の三月、官選知事として青森に参りました。そこで健康により退官するまでの一年半余を過ごしております。知事になる前の四年間を内閣東北局長の職にありましたので、役人としては珍しく青森にご縁の深い経歴をたどったことになります。

当時の県庁はいまとほぼ同じ所にありました。コの字型、三階建てで正面玄関は港の方を向いていたと思います。官舎は県庁と砂利道を挟んで国道に沿っており、陸橋をおりた所が車寄せになっていました。当時のことですから軒並みは低く、街は冬の雪に汚れ、どれも黒ずんだ感じだったと記憶しています。青森駅の前では汽車が着くたびに客引きのおやじさん連中が「夕方のお休みに酸ケ湯温泉はいかが」と呼びこみに懸命だったものです。それでも戦時色は日増しに濃厚になり、津軽海峡はもちろん危険な状態にありました。

〝若い血潮の予科練の、七つボタンは桜に錨…〟大人の憂色を払いのけるかのように官舎の前では毎朝、小学生たちが黄色い声をはりあげ、軍歌をうたって行進していきました。「アッツ島玉砕」の山崎部隊の英霊が青森駅についたり、玉砕を描いた藤田嗣治画伯も見えました。子供ながらも「暗きょ排水」などという言葉を覚えたのも県庁の人が盛んに使っていたためで、これは食糧増産に備え、水田を改良するのが目的でした。

これに伴って畑作奨励のためリンゴの木を伐採せよという中央からの指示がありましたが、「これをやめてもらうには随分苦心した」と父は述懐しています。ある夜、警察の幹部の方が官舎に見えましたが、極秘と判の押された書類をそっと見ると「敵ノ大規模機動艦隊、千島ニ接近中」とありました。

戦時下に青森県知事を務めた故宇都宮孝平氏

（井関農機本社松山事務所長）

戦時下のねぶたと父 〈下〉

宇都宮　弘之

こうした状況のなかで、「青森の有志の方からねぶたを運行させてくれという注文があった」ようです。盛田文雄氏の「百年の年輪」によれば「名物のねぶたも戦争中だというので中止、県民には娯楽がすくなく、東奥日報の相撲大会、民謡大会がわずかに残っていた状態」で「それで宇都宮は元気作興には許可を与えて心理一転した方がよいと考え許可した」とあります。後に父に聞いたところではこの許可につき了解を得るため、時の宰相に陳情したということです。

ともあれ「物の不自由な時というのにどこからか資材を集めてねぶた作りが始まり、東奥日報や熊地組の『巴御前』など七組が運行された」（「百年の年輪」）わけです。「知事官舎の前では万歳を唱えたり、宇都宮に挨拶（あいさつ）して通った」と氏は書かれております。以後、ねぶたは私たち子供にとっても心に残る大きな存在となりました。そして「宇都宮はこのねぶたを見て青森を去った」のです。

病の床から青森を思う

父は「自らを語るなかれ」という祖父の教えに従ったのか、生来の寡黙に加えて自分のことをあまり語ろうとはしませんでした。それでも明治・大正・昭和と激動の三代に生きて大戦前夜、内閣賞勲局書記官として文化勲章の制定に従事しえたこと、二度にわたる任地青森でいささかでもリンゴの木やねぶたの灯を守れたこと、戦後は郷里松山で市長として地方自治に奉仕、初志により行政の道を志したことをひそかな喜びとし、誇りともしておりました。

一昨年、NHK大河ドラマ「いのち」で弘前医大のことが話題になった時、父はすでに何度目かの病床に伏す身でした。当時、医専の設置は高い幼児の死亡率対策だったわけですが、中央から認可の知らせを電話で受けた三浦さんという若い県庁の人の興奮ぶりを思い出して話しかけますと、父は大きくうなずいておりました。

今年の三月のことです。医師からそれとなく死期の迫ったことを伝えられた私たちは、父の病室にビデオを持ち込みました。ねぶたのテープが二本。私がヨーロッパ駐在から帰国直後、青森から父に送った古いねぶたのミニチュア、それに畏友（いゆう）渡部青森ヰセキ社長に新しく求めてもらった青森と弘前のねぶたの模型―。それが音と映像、模型と照明による"立体的祭典"の幕開けでした。

昭和10年前後の青森ねぶたまつり

春に早い南国の病室で時ならぬねぶた祭りが再現され、次々と現れるねぶたに勇ましいハネトの声は廊下にまで流れます。父はじっとテレビを見つめていました。ねぶたの一つを胸元においてあげると、細く萎（な）えた手を伸ばした父は、無言のままいつまでもねぶたを抱いて離そうとしませんでした。次の日、私が「きのう、ねぶたを見ましたね、覚えてますか」と問うと、父は一言「見た」とこたえました。それは私が父から聞いた最後の言葉となりました。

二カ月後、私たちは父の棺の中にねぶたを入れ、胸に善知鳥神社のお守をそえました。青森の地から遠ざかること久しく、晩年は模型を縁側で眺めるだけで、ついにねぶた見物を果たせなかった父ですが、今年はきっと天国からねぶた祭りの灯を見ることができるのではないかと思ったりもしています。

（井関農機本社松山事務所長）

「戦時下のねぶたと父」宇都宮弘之

愛媛県地元紙に投稿